

〔JSRI時事エッセイ鈴懸の木の下〕

「鈴懸の木の下」とコロナ

増井喜一郎

一、「JSRI時事エッセイ鈴懸の木の下」の創設

二〇二一年はコロナ感染拡大が続き、二度目の緊急事態宣言が発出される事態での年明けとなった。昨年初にCOVID-19の国内感染者が確認されて以来、我々の生活環境は一変し、これまで当たり前と考えてきたことの多くがそうでなくなった。特に、昨年四―五月の一回目の緊急事態宣言前後の時期は当研究所も事実上事務室が閉鎖

状態となり、研究員は原則在宅研究、多くの研究会は中止という状況に陥った。先行きの見通しが立たず、お互いのコミュニケーションが途絶え孤立感が高まった。

そのような中、部内で本誌の企画について話し合った際に、①コロナ下でほとんど全ての研究者、証券関係者が非日常の体験をし、専門分野だけでなく他の領域についても様々なことを感じ、気づき、考えているに違いないこと、②しかしながら、こうした意見、思いはSNSを通じて盛んに発信している人以外の多くの人々については、

発信が行われずそのまま埋もれてしまっていること、③議論の場としてオンラインを利用する方法もあるが、本誌のような刊行物においても専門分野やそれ以外の分野について気軽に見解を述べ合う場を設定し、沈滞しがちな研究者、証券関係者の意見交換を少しでも促したいと考えたことから、新たに新型コロナウイルスの感染拡大がもたらす影響、問題点を始めその時々々の経済、社会の課題について専門を問わずに研究者の見方、考え方をタイムリーにわかりやすい形で提供する「時事エッセイ」のコーナーを設けることとした。

このコーナーの名称は当研究所の若園智明主席研究員の提案で「鈴懸の木の下」とした。当号の表紙裏に説明がしてあるが、プラトンが開校したアカデメイアに多く繁っていたプラタナス（鈴懸）の木の下の哲学者や学生が議論したという故事などに因んで名付けられたものである。ギリシ

アの哲学者達のように幅広い分野での自由闊達な議論の場になることを期待したい。

一、パンデミックの記憶

「鈴懸の木の下」のコーナーを作ったもう一つの理由は、今回のコロナ下での特別な体験を忘れないために何かを残したいと思ったことである。識者によると大規模な感染症が発生することはそれほど珍しいことではないが、それにも拘らず実際にやってくると何故か人々は過去の流行を忘れて驚く。戦争や感染症の流行は世界をリセットするが戦争は我々の集合的な記憶にくっきりと跡を残すのに対してどういう訳か感染症は記憶に残らないという。

スペイン風邪は二つの世界大戦を上回る最も悲惨な出来事だったが、最近になるまでは世界中で

ほとんど忘れ去られていた。百年前のスペイン風邪では両大戦の死者数を合わせたのと同じくらいかそれ以上の犠牲者が出た可能性があるが、現在の図書館のデータベースにはスペイン風邪に関する本は第一次大戦の本の二〇〇分の一しかないという。また、日本のスペイン風邪に関する日本人研究者の論文も今世紀に入るまで一本しかなかったという。

歴史書、物語などにパンデミックの記憶が残り難いのは死者数などの影響の測り難さに加え、成り行きの中での起承転結がはつきりせず物語ににくいこと、一部を除いて英雄的なシーンやインプレッシブな場面を描き難いことなどが理由として考えられる。今回のコロナ禍でも一部に体験記などが刊行されているが、多くの人々は初めての緊急事態宣言下での心境をすでに忘れかけているのではないかと恐れている。

先に述べた経緯によりこの時事エッセイは生まれた。コロナ下での体験がこのコーナーの創設につながったのでありそのことを今後とも忘れずにいたいと考えている。

三、コロナ問題について

このコーナーの趣旨に沿ってここで最近のコロナ対策に関する議論について、個人的感想を二―三述べてみたい。いずれもすでに様々な形で指摘のされていることではあるが。

第一に、コロナ感染の社会経済に対する影響についてである。歴史的にもペスト、天然痘、コレラ、インフルエンザ等の流行は社会構造、経済構造に大きな変化をもたらしたとされる。しかし、今回のコロナ感染は始まってから一年ほどであり何世紀もわたって感染爆発を繰り返してきた感染

症とは時間的なスケールが異なる。従って、今回一時的に変容した人々の生活スタイルや行動、政府の施策の多くはコロナの収束とともに元に戻ると考えられる。たとえば、国境封鎖、ソーシャル・ディスタンス、フェイスシールドなど。一方でコロナ以前から生じていた社会経済的変化がこの間さらに促進され、コロナ後には相当構造が変わってくるのが予想されるものもある。たとえばDX化、働き方の変化など。また、都市分散化、グローバル化、民主主義国家と権威主義国家の競争対立、国際的協力体制などはプラスとマイナスの双方のベクトルが働き、コロナ問題というよりさらに長期的な課題となると思われる。さらに、緊急事態で急いで作られたもの、たとえば各種の感染症予防制度、ワクチンなどは以後も比較的に長く残ることになるのではないだろうか。

第二は政府のコロナ対策についてである。検査

医療体制、経済的困窮者や打撃を受けた業界への救済対策等前例のないほどの大規模で幅広い対策がとられているが、政府に対して様々な方面からの批判が寄せられている。それぞれの立場からの批判は勿論重要なことだが、一方で今回のコロナ対策は感染症の拡大抑止、死者重症患者の抑制、医療体制の防衛、経済的弱者の救済、景気下支えなど数多くの政策目標がありそれに対する政策手段にはじめから限界があること、コロナの実態や予防対策に関する確固たる科学的エビデンスのない中で感染症や経済などの専門家が確信を持った処方箋を提示することが難しいことなどから政策はどうしても試行錯誤の繰り返しにならざるを得ないことを我々は改めて認識する必要がある。コロナ下の政策は各種の政策要求のバランスを保ち時宜に応じて優先順位をつけて行うというものになり一つの要求、一つの考え方に過大な資源を投

入することは難しい。政府も柔軟に批判を受け入れる必要があるが、一部のマスコミのように都合の良い所だけ諸外国の例を引いてヒステリックに政府批判を行うのではなくその時点で実行可能な提言を冷静に行うことが必要ではないだろうか。

第三はコロナ収束に依じて現在のようない例外的な経済政策からどのように正常化するのかという問題である。異常時に慣れた国民、企業の意識行動が急に元に戻るのだろうか。おそらくは収束時に日本経済が直面する状況はこれまでになく厳しいものになっていることだろう。それを乗り越えるには今から相当の覚悟や準備を怠りなくしておく必要がある。最後に決めるのは人々の自律心、向上心、公共心などだろう。精神論で終わるのはいささか安易だが、一方で研究者専門家の役割は客観的な分析、理論に基づいて的確な処方箋を少しだけ勇気を奮って今のうちから提示しておくこ

とではないだろうか。

四、寄稿のお願い

「JSRI時事エッセイ鈴懸の木の下」は、すでに昨年七月（第六〇巻第七号）の野村容康獨協大学教授から連載が始まっている。これまで六本のエッセイはいずれも創設当初を飾るにふさわしい素晴らしいものであり寄稿された方々には心から感謝したい。

年の始めに筆者が改めて時事エッセイの創設の経緯や思いのときの時事テーマについて述べたのは、今後このコーナーで特に若い研究者、証券関係者に専門外の分野を含めて幅広いテーマに関心を持ってもらい、自由に気楽な議論をして頂きたいと考えたからだ。毎号掲載している何本かの「学術エッセイ」とは一味違うエッセイとして今

後読まれることを期待したい。皆様の少し大胆で積極的な御寄稿を是非お願いしたい。

(ますい きいちろう・日本証券経済研究所理事長)